2013年（平成25年）
第64号
（4月1日）

平安月報
The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
編集委員長：渉外広報　植田恭司
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211
FAX (075)762-2266

「三つの実践」が世界平和への第一歩　創立記念式典にて

３月５日、本部大聖堂並びに全国の教会において、本会創立 75 周年の記念式典が行われました。大聖堂には 85 教会から参拝があり、中にはモンゴル教会からも８人の参加がありました。

大聖堂には各界から多数の来賓がありました。その代表として、出口紅・大本教主から祝辞をいただきました。

庭野会長から「釈尊の最初の悟りは縁起の教えで、世界平和に向けて最初にすべきことは『目の前の人と明るく優しく温かい心でふれあうこと』。隣人や家族など身近な人への『三つの実践』が大事で、怨みや怒りの心を慈悲の心に変えれば平和になる。さらに、人間は同じ生命を頂いているという『一乗の精神』により、人間同士が争うことのないようにしないといけない」とご法話がありました。

最後に佐藤教会長から「出口教主の格調高い祝辞から、心を磨くことは神道も仏教も同じだと教えられた。会長先生からは『仏子の自覚』『菩薩行の大切さ』を教えていただいた」とおことばを頂き、参加者は本会創立の精神「人を救い、世を立て直す」を再確認しました。

（上）教会での式典（下）出口・大本教主

大震災を忘れず、こころひとつに歩みます　新宗連京都青年部「福幸の祈り」

加盟教団代表による献鶴

「東北食堂」の食事

３月９日、京都教会において新宗連京都府協議会青年部による「福幸の祈り」が開催されました。２年前に発生した東日本大震災の被害者への慰霊と早期復興を祈念して、同青年部が昨年から始めた取り組みで、今年で２年目となり、ＰＬ教団、松緑神道大和山、解脱会、天恩教、立正佼成会の５教団から 30 人の青年が参加しました。

一部の式典では、始めに新宗連京都府協議会議長でもある佐藤教会長から挨拶があり、加盟教団から折り鶴の奉献が行われ、それぞれの儀礼による慰霊が行われました。その後、宮城県石巻市で震災に遭われ、京都に移り住んでおられる方と、自衛隊員として現地の復興支援に行かれた方が体験を語りました。

その後「東北食堂」と称して、各教団が東北の産品を使った料理を食事しながら語り合い、青年たちが親交を深めることができました。

震災被災者の体験談

自衛隊員の報告

時々刻々

今年は全国的に桜の開花が早く、京都市内は多くの観光客でにぎわっています。桜は冬の寒さから人々を解き放ち、心浮き立つ気にさせます▼夜桜で有名な円山公園では今年からブルーシートの使用が禁止されることになりました。場所どりで長時間占拠して、景観を悪化させ、桜の生育にも影響するためだといいます▼市内の校庭には満開の桜が新一年生を待っています。待ちに待って咲いた花と、入学するまで成長した我が子の姿を重ねて見る親も多いことでしょう▼桜は前年の夏から花芽を形成し休眠に入ります。冬になって、一定の期間低温にさらされて休眠から覚め、春の気温上昇によって生長し開花するのだそうです▼日本人に最も親しまれ、寒さが厳しいほど立派に花を咲かせます。桜のように苦難を乗り越えていくことで、素晴らしい人生になると信じたいものです。

今月のことば　～素直に学びつづける～

京都教会長　佐藤益弘

道元禅師の有名な歌、「春は花　夏ほととぎす　秋は月　冬雪さえて　冷（すず）しかりけり」というものがございます。日本の四季の美しさを詠んだ歌といわれています。この歌の題は、「本来の面目」というもので、仏の姿という意味と解せます。そもそも「本来」は、大いなる本から来られた「如来さま」「仏さま」と受けとることができます。四月八日、「釈尊降誕会」を迎えるにあたり、二千五百年前、真如の世界から娑婆世界に来られたお釈迦さまのご誕生を心から祝い、感謝を申し上げたいと思います。

さて、４月は、**～「驚き」から創造が～**というご法話を会長先生から頂きました。最初のところでは、「世の中は常に**『日日に新たなり』**であるのに、さまざまな変化を漫然と見過ごしていて、感性が鈍ったり想像力や創造性を失っているのかもしれません」と書かれてあります。さらに、その後に、「気づきや驚きが人間を成長させ、感性を磨くといっても過言ではありません」とあります。つまり、人間の成長のためにも、創造的に生きるためにも**「驚き」というものがとても大切**であるということを学ばせて頂きました。

私自身、日常の生活を振り返ってみますと、自宅から教会までは、ほぼ同じ時間に、同じルートで、同じ歩数で通っています。極めてマンネリ化しており、ものごとの変化に疎くなっているわけです。これでは感性が磨かれるとか、新鮮な発見や驚き、感動があるはずがありません。考えてみれば、昨日まで蕾だったのが、翌朝に開花しているのを見ると、驚嘆するものです。そういう日常に戻したいと、つくづく思いました。

先日、**とても有り難いお話**を聞かせて頂きました。京都教会で、法華経の教えをしっかり学ばれ、現在は看護師としての資格を生かして仕事をされている信者さんのお話です。勤めている施設に、ある高齢のご婦人がいて、その方のために、週２回、洗濯物を運んでこられるお嫁さんがいらしたそうです。

ある時、施設内でお世話をしている信者さんが、「せっかく洗濯したものを持ってこられたのですから、お姑さんに靴下を履かせてあげたらいかがでしょうか…」とお嫁さんに声を掛けられたそうです。すると、お嫁さんは**素直に行動**に移され、しばらくしてから、目に涙をいっぱい浮かべて部屋から出てこられたそうです。

部屋の外にいた世話役の信者さんに抱きついて、涙ながらに、「今日は有り難うございました。靴下を履かせ終わったら、初めて私の名前を呼んでお礼を言ってくれました。嫁いで２０年経ちますが、これまで名前を一度も呼んでくれたことはありませんでした。嬉しくて、有り難くて…」と話されたそうです。

ご法話の後段に**「出会いを成長や喜びに変えるには…そのコツの一つは、素直になることです」**と教えて頂いております。上記のお嫁さんの素直さこそ、出会いを成長や喜びに変えられた善きお手本として学ぶべきものではないかと思いました。

今月、私は素直になって、人生の大事な気づきを得られるよう学びつづけて参りたいと思っております。

自然や人々とともに歩む宗教の『智慧』こそ大切　～ＷＣＲＰ平和大学講座～

徳永教授の基調講演

パネルディスカッション

３月１３日、八坂神社常盤新殿において「現代文明に生きる私たちに問われているもの～知から智慧への転換を目指して～」をテーマに、公益財団法人・世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）日本委員会の平和大学講座が開催されました。基調講演とパネルディスカッションが行われ、同委員会の庭野日鑛会長はじめ役員や賛助会員、立正佼成会近畿支教区の会員ら約１３０人が参加しました。

徳永恂（まこと）・大阪大学名誉教授は基調講演で、ドイツの哲学者カントの平和思想にふれ、故郷・長崎の原爆被害を目の当たりにした体験もあり「永遠の平和を実現するために国家や宗教を超えたルールづくりと話し合いが必要だ」と述べました。

続いて眞田芳憲・ＷＣＲＰ日本委員会平和研究所所長、中央大学名誉教授がコーディネートし、徳永教授と森孝一・神戸女学院理事長・院長、黒田壽郎・ＷＣＲＰ日本委員会平和研究所所員、国際大学名誉教授の３氏がパネラーとなってパネルディスカッションが行われ、「人類の幸福のために築かれた現代文明や考え方が人間中心になっていることを改めるべきだ」と問題提起されました。

最後に眞田教授は「科学技術などの現代社会の『知』から、神仏のもと自然や他者とともに生きることの大切さを説く宗教的『智慧』への転換が必要な時代になっている」とまとめました。

「大本」が奉仕　京都市深草墓園春季慰霊祭

門川市長の式辞

大本による慰霊

３月24日、京都市深草墓園にて京都市主催の春季慰霊式典並びに遺族会主催の慰霊祭が執り行われました。

式典は門川京都市長の式辞、山岸京都市議会副議長と遺族代表の弔辞、献花が行われました。

慰霊祭では京都市宗教連盟から「大本」が担当しました。神式による慰霊が行われました。参加者は玉串を捧呈して祈りを捧げました。

宗教協力の大切さを確認　新宗連近畿集会

稲村ＰＬ大阪中央教会長

園立正佼成会
西日本教区長

本会の大阪普門館において３月28日、「60年の絆ー新たなる誓いを」をテーマに新宗連結成60周年・近畿総支部記念集会が開催されました。集会では「60年のあゆみ～世界平和に貢献する　新宗連に今、必要なこと～」と題して、稲村欽吾・ＰＬ教団大阪中央教会長と園浩一・立正佼成会西日本教区長の講演が行われました。

参加者一同、信教の自由を守り、宗教協力を推進することを確認し合いました。

庭野平和賞受賞者　グナール・スタルセット師

前号、公益財団法人・庭野平和財団は第３０回庭野平和賞をノルウェー国教会オスロ名誉監督のグナール・スタルセット師に贈呈することになったと紹介しました。

グナール・スタルセット師は１９３５年、ノルウェー・ノールカップのフィンランド移民の家庭に生まれました。子供時代には貧困と民族差別を経験しましたが、多民族地域の環境から自尊心を持ち、他者に寛容であることの大切さを学びました。そして祖先から受け継いだキリスト教の信仰によって宗教と政治に対する自らの使命感を育みました。

ノルウェー神学校卒業後、聖職者の道を歩み、７０年にノルウェー国教会エキュメニカル（キリスト教の教会一致運動）国際協議会事務総長、８５年にはＬＷＦ（ルーテル世界連盟）事務総長に就任。東欧での民主化では国の枠を超えて加盟教会を助け、南アフリカとナミビアの反アパルトヘイト（人種隔離政策）運動に積極的にかかわりました。そしてキリスト教、イスラーム、仏教、ユダヤ教、ヒンドゥー教などにわたる幅広い宗教対話を進め、具体的な平和活動を目指した諸宗教協力に尽力。東ティモールの和平調停を担当。ミャンマーに関する特別ハイレベルフォーラムを開設し、委員長として手腕を発揮しています。

現在、ＷＣＲＰ（世界宗教者平和会議）国際委員会執行委員のほか、共同で設立したＥＣＲＬ（欧州諸宗教指導者評議会）の議長を務めています。

庭野日敬の著書に学ぶ　「人生、心がけ」より③

****

この世の中には、白か黒かはっきり分けられないことがいくらでもあります。むしろ白でも黒でもない中間の灰色のほうが多いと言ってもいいでしょう。（略）

自分にとってどちらが得か損かで判断するのではなく、どちらが周囲の人のために役立つか、そして、みんなの仏性が少しでも目覚めてくれるようにということを尺度にして考えるのが、上り坂の道だと言っていいでしょう。目先の損得にとらわれず、みんなのためを考えた道は、進むにつれておのずから展望が開けてくるのです。これこそ人生の醍醐味です。

****

会社や学校など、４月は年度初めというところが多いですね。新年度の目標や方針が立てられることでしょう。庭野開祖は同書で目標について次のように述べています。「大乗仏教では、目標に到達すること以上に、それに向って歩み続けることを大切にしています」と。

世間では成果主義や実力主義という考え方が一般的です。結果によって評価しようとしますから、みんな結果を追い求めます。そのため、他と比較して「勝ち負け」を競う場面が多くなるのではないでしょうか。

企業家として成功された方を見ると、自社の業績向上だけを求めてはいませんでした。世の中の困っている人の手助けになる製品を提供するとか、みんなが喜んでもらえるようなサービスをしていこうとかいった目標や理想を持っておられました。

言い換えれば、自分中心の見方からより多くの人のために自分ができることに取り組もうとすることが大切です。年度に節目にそんな目標を考えたいものです。「人生の醍醐味」を味わうためにも。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《心を育てることが宗教の本業》

英国国教会のカンタベリー大主教といえば、国王の戴冠式を執行して王冠を授ける首位聖職者です。そのカンタベリー大主教のラムゼー博士が、立正佼成会に訪ねてこられました。四年前に庭野開祖が平和会議への協力要請のため英国のカンタベリーにラムゼー大主教をお訪ねし、ご自宅でシェリー酒を頂戴しながら懇談させて頂いたことがあったのですが、大聖堂を訪ねられたラムゼー大主教は「数年前、庭野さんが私のところを訪ねて下さったときの、話しの続きを聞かせてもらいにやって来たんですよ。仏教の話を聞かせて下さい」と切り出されたのです。

庭野開祖は英国国教会が日本に大学や病院を建てて文化の向上に大きな役割を果たして下さったお礼を申し上げ「仏教もキリスト教に学んで、社会奉仕の事業にもっと力を注がなければならないと考えているのですが」と話しました。するとラムゼー大主教は「いや、いや。われわれ西欧のキリスト教会は社会的な活動に力を入れすぎて、心の面を育てることを怠ってきました。社会事業はあくまでも宗教の副業でしかありません。**宗教の本業である心の育て方を、東洋の仏教、特にあなたの会から学びたい**と思ってやってきたんですよ」と言われ、立正佼成会の修行のあり方について、次から次へと尋ねられるのでした。

世の中の現実から離れてしまっては、現代を生きる人たちを救うことはできません。宗教者の救いは、あくまでも各々の心を耕すことによって現実を変革していくことにあるのだと、改めてラムゼー大主教に教えて頂いたのでした。**『コップに水がいっぱい入っていると、新しい水が注がれても、もう受け入れようがない。自分のちっぽけな力、知識に固執してそれがすべてだと思い込んでしまったら、そこで成長は止まってしまう』**でしょう。

立正佼成会が今日に至ったことについて「その秘訣はどこにあるのか」と尋ねられるが、「秘訣など何もない。もしあるとすれば『私は足りないだらけの人間です』と、庭野開祖がすべてをさらけだしているので、皆さんが『助けてやろう、後押しをしてやろう』と応援をして、力を合わせて下さったからではないだろうか」と言えるでしょう。仏教には「見聞即知、皆菩提に近づく」という言葉があるが、**謙虚でありさえすれば、見るもの、聞くこと、触れるもののすべてが悟りに近づく一助となり得る**のです。

（次回に続く）

「アフリカへ毛布をおくる運動」キャンペーンがスタート　４月１日～５月31日

「アフリカへ毛布をおくる運動」（同運動推進委員会主催）が、４月１日から５月31日まで実施されます。同運動は今年で29年目を迎え、これまで400万を超える毛布がアフリカ各国に届けられてきました。

京都教会では「“分かち合う、思いやりの心”　実践を通して育てる！」を目的として、「アフリカを忘れない！！～同悲、同苦、同喜をあなたと～」をテーマに、広く市民に呼びかけ、収集活動を展開します。

同運動は、ＡＭＤＡ社会開発機構、ＪＨＰ・学校をつくる会、日本国際ボランティアセンター（ＪＶＣ）、立正佼成会で構成される委員会によって推進されています。

配付先のアフリカ各国では、自然災害や紛争により、多くの人々が厳しい生活を送っています。困窮する人々にとって、配付された毛布は寝具や産着などに活用され、過酷な自然環境や生活の中で命を守るために不可欠なものとなっています。

渉外部からのお知らせ

●４～５月の主要行事予定

４月１日	朔日参り・布薩の日	９：00～
	同夜間式典	19：00～
４月７日	花まつり	10：00～
４月15日	布薩の日	９：00～
５月１日	朔日参り・布薩の日	９：00～
５月15日	布薩の日	９：00～
５月18日	庭野平和賞シンポジウム	13：00～
５月19日	こころひとつにフェスティバル	９：00～

●メッセージ

３月２０日は庭野日鑛会長の誕生日でした。その日は国連が定めた第一回の「国際幸福デー」でもあるそうです。昨年、幸せの王国といわれるブータン国王が提唱し国連総会にて採択されたそうですが、「世界中の生きとし生きるものが、幸せでありますように」と、願っておられる会長先生の誕生日と一緒になるとは驚きです。神仏の計らいとしか、言いようがありませんね。